

海外と比較して考える日本のストリートダンス

日本のダンスは、日本舞踊や歌舞伎舞踊などの伝統的な舞踊からストリートダンスまで、広く多彩な歴史を持っている。日本のストリートダンスは東京を中心とした都市部の若者から始まった文化で、1982年にアメリカで公開された映画「Flashdance」をはじめとし、映画やテレビ番組がアメリカから輸入され発展していった。本論文では、最初は輸入文化であった日本のストリートダンスは、他国と比べてどのような特徴を持ち、どのように発展し、どのような文化的・社会的側面を持っているのかを研究した。

日本のストリートダンスとともに、アメリカ・ヨーロッパ・韓国の計4つの地域のストリートダンスを先行研究や各国の事例の検討を通して明らかになったことは、ストリートダンスが単なる「輸入文化」ではなくそれぞれの地域で再構築されて発展していったということである。そして日本では特に教育を通してストリートダンスの社会的意義が再構築され、かつての反抗や抵抗を象徴する特別なものから、誰でも気軽に始められる「協調」「共感」「アイデンティティ」を体現する手段として変化したのだ。

しかしその一方で、ダンスの普及が進むほど、その背景にある文化的意味が見えづらくなっている現状もある。ストリートダンスはもともと、社会の中で声を上げにくかった人々が、自分の存在を示すために生み出した表現だった。だからこそ、その歴史や背景を知らずに踊ることは、文化の“魂”を失わせる危険もある。ルーツを学びつつも、それを「借り物」のままにせず、日本社会の現代的な課題と重ね合わせることで、新しい表現文化へと発展できる。

ストリートダンスが違いを超えて人と人をつなぐ力になっている中で最も大切なのは、身体を通じて何を伝えたいのか、どんな想いを共有したいのかという根本的な問いを忘れないことだ。最終的に、日本のストリートダンスは制度化や大衆化が進んでも、「誰でも踊っていい」「どんな人の表現も尊重される」という原点を守りながら、文化としての深みを育てていくことが求められる。ストリートダンスが教育の場や地域社会、国際交流の現場で活用されるとき、それは単なる運動ではなく、「他者を理解し、共に生きる力を育てる文化」としての意味を持つ。踊ることが個人の解放であると同時に、社会の共生を形づくる行為であることを、私たちは改めて認識する必要がある。